なぜ人は自己犠牲をしてしまうのか

比嘉春海（人間学コース）

（指導教員：堂囿俊彦）

キーワード：利他的行動、自己利益、良心

はじめに

私たちの社会では、他人に利益を与える行動である「利他的行動」、その中でも、自らの命を失う可能性がある中での利他的行動である「自己犠牲」は広く称賛される。しかし、利他的行動と利己的行動が明確に区別できるとは言い難い。行為時点では「純粋に相手のため」だと考えていても、のちに見返りを意識することもあるからだ。利他的行動と自己利益が結びついているのならば、なぜ人は、自己の利益を失うかもしれない自己犠牲をしてしまうのであろうか。本稿では、さまざまな学問が利他的行動と自己利益の関係をどのように捉えているのかを確認した上で、人が自己犠牲をする理由を考察する。

第１章　心理学から見た利他的行動

第１節　向社会的行動発生のプロセス

心理学において、他者のために行う行動は「向社会的行動（思いやり行動）」と呼ばれ、外的報酬（金銭、地位、名誉など、外部から与えられる報酬）を目的とするものはそれに含まれない。菊池によると、人が実際に向社会的行動を起こすまでの過程は３段階に分かれる。それは、状況の認知（気づき）・意思決定・行動である。段階間で向社会的判断力・共感性・役割取得能力など行為者本人の特性が関わるため、複数人が同様の状況に際しても同じ選択をとるとは限らない。

第２節　向社会的行動と自己利益

この向社会的行動発生のプロセスに沿って人が利他的行動をする理由に回答を与えるならば、「困っている（であろう）人がいることに気づき、その人を助けたい（助けなくてはならない）と感じたから」だと言える。これは、一見自己利益とは何ら関わりのない答えに思えるかもしれない。しかし、向社会的行動においても、自尊心の向上、成長、充実など、行動そのものから生み出される報酬である、内的報酬を望むことはかまわないとされている。

また、動機づけとして機能している報酬を、行為をする時点で認識している必要はない。実際、進化論によれば、私たちは自らの遺伝子の生存と繁殖という利益にもとづいて行為するとされるが、こうした目的を私たちが意識することはほとんど（あるいはまったく）ないのである。

第２章　進化論から見た利他的行動

第１節　19 世紀の進化倫理学

進化倫理学という分野が未発達な 19 世紀に倫理を進化論と結び付けて語ろうとした者として、ハーバート・スペンサーとトマス・ヘンリー・ハクスリーが挙げられる。彼らは人間の「共感能力」をカギとして、それぞれのやり方で倫理を説明しようとしたが、どちらも進化論という土台の上で議論を成立させることができなかった。

第２節　20 世紀の進化倫理学

だが、人間行動進化学という分野の発達のおかげで、20 世紀になってようやく、倫理を進化論の枠組みの中で説明する道が開けた。つまり、主観から離れて、人間をまったくの外部から見ることで進化倫理学が成立したのである。

内藤は、利他的行動の発生に関して、対象を行為者との関係の深さという側面から、①血縁者、②夫婦・恋人、③知人、④見知らぬ人の４つに分類する。①と②に対する利他的行動は自己の遺伝子の存続、③は互恵関係の構築、④は評判の利益の獲得と、対象者によって違いはあるが、すべて「自己利益を得るために利他的行動が発生する」という結論に達するのである。

第３章　文化人類学から見た利他的行動

第１節　社会的統制と良心

クリストファー・ボームによると、利他的行動の要因となるのは我々の「良心」であり、これは、「集団とのいざこざを避けることで個人の適応度を高める能力」、また、「自分の集団のルールを内面化する力」である。この「良心」は「道徳的ではなかった社会統制」から生まれたと考えている。この社会統制とは、ヒトやチンパンジーらの共通祖先が形成した社会に敷かれたもので、われわれ人間の社会統制とは大きく異なる。彼らが感じるのは罰せられることへの恐怖であり、罰する側が感じるのも乱暴者に対する単純な怒りと敵意である。これに対してわれわれの社会統制においては、自我に加

本要旨は、『2022 年度 静岡大学人文社会科学部 卒業論文要旨集』第 19 号に掲載されたものを、著者の許可を得て掲載するものである。許可なく転載することを禁止する。

えて、的確な善悪の判断力・羞恥心・名誉と誇りの感覚が重要な役割を果たす。ボームは前者を「道徳的ではない」社会統制と呼び、後者を「道徳的な」社会統制として区別する。

第２節　「道徳的な」社会統制

「道徳的な」社会統制の内容は様々で、逸脱者を集団で協力して処罰するという点では共通祖先の社会統制と同様である。ただ、このような社会統制に至るまでに集団内で意見の一致が図られており、そこに「うわさ話」が用いられた。これによって、集団内で誰が良い振る舞いをして、誰が悪い振る舞いをしているのかという情報を交換することができ、社会的評価を下せるようになった。この中で、人々に良心がはたらいていたのは明らかである。集団内でうまく生きていくためには集団のルールを内面化、つまり、自分の価値規範として取り込む必要があり、そのように自分のものとなったルールに反した行動をとれば、あとから罪悪感や恥の意識に苛まれる。言い換えれば、良心を持っていたために利己的な欲求を自制し、自らの適応度を上げることができたのである。

第３節　道徳性が生じるプロセス

このように、良心は集団での生活の中で生きていくために必要なものであり、利他的行動の発生はその良心に起因している。また、集団社会が発達することで集団内での協力行動が求められ、良心もそれとともに発達していった。さらに、かつての人類が過ごした環境は頻繁に変動しており、それに対応するべく良心は柔軟性を持っていた。これによって、どんなときでも集団の利益のための利他的行動が起こされるというわけではなく、状況に応じて利他的行動の対象が狭まることもあるのだ。したがって、人が利他的行動をとるのは道徳性を求められる社会に適応するためであり、自分にとって負担の大きい自己犠牲をしてしまうのは、柔軟性を持つ良心がその調節を誤るからだと言うことができる。加えて、ボームは良心の発達に関して、「脳」の役割を重要視している。そこで、次章では脳科学の側面から利他的行動を考察する。

第４章　脳科学から見た利他的行動

第１節　脳間・脳内操作系の進化

人間の脳において特に発達した前頭連合野は、様々な脳内システムを操作しているという点で「脳内操作系」の役割を果たしているとともに、言語を使用して相手の感情を理解・推測し、自分の都合の良いように相手の行動や感情を操作する「脳間操作系」の役割も担っている。これらが発達した理由を、澤口は「形質＝選択圧連結説」によって説明する。これは、動物がつくる「形質」である複雑な社会が同時に選択圧となって、より適切な社会関係を営む脳を持つ個体の適応度が高まり、次世代においてまた社会関係がより複雑になって選択圧となる、といういわば正のフィードバックである。

また、社会関係の中でも特に選択圧となるのは、「共恵戦略に基づく社会関係」であった。共恵戦略とは、「集団内のメンバーが互いに利他的行動をし合うことで集団内のメンバー達の適応度を相対的に高める戦略」のことで、互恵的利他主義から発達してきた。自分が他者から利益を享受したことを記憶し、その恩を返すための行動を選択するように自分の脳内を操作する。一方で、他者に利益を与えることでお返しをしてくれるように将来において他者の脳も操作する、というまさに「脳間・脳内操作系」が深く関わっている。

第２節　人間が利他的行動をとる理由

元々は自己の遺伝子の存続を目的として、社会に適応するという形で利他的行動が行われていたが、進化の過程で社会と利他的行動を引き起こすための脳がともに変化していった。その結果、自己の遺伝子の存続というよりも社会への適応という目的がより強い意味を持つようになり、その手段として、脳が利他的行動自体を幸せだと感じる仕組みを得た。そのため、そのような仕組みによって社会の構成員の適応度が高まったとしても、「自己の遺伝子」に必ずしも利益が生じるとは言えなくなった。この答えは長い歴史の中で、人間にとっていかに人とのつながりが重要であったかを示しているだろう。自分の利益になろうが、純粋に人を助けたいと感じようが、結局は自分の「幸せ」に通じるものであり、「幸せ」を求めて行動することで助け合いの社会が成り立っているのである。

まとめ

どの分野においても利他的行動の発生が内的報酬や外的報酬といった自己利益と結びつけて説明され得ることを確認した。ただ、どちらの利益も得られないような自己犠牲を説明するには、現在のところ、「脳や良心の調節ミス」を持ち出すしかない。

我々は、利他的行動の背景に自己利益がある場合に、それを安易に批判する。しかし、内的報酬であれ外的報酬であれ、どのような利他的行動も自己利益と結びついているということを前提とすれば、そのような批判は不適切である。利他的行動に自己利益が不可分に結びついているとして、どのような利他的行動であれば適切であり、どのようなものは不適切であるのか、その線引きをあらためて検討する必要がある。

主な参考文献

- 菊池章夫『もっと／思いやりを科学する』川島書店、2018 年
- クリストファー・ボーム　斉藤隆夫訳『モラルの起源　道徳、良心、利他行動はどのように進化したのか』白揚社、2014 年
- 澤口俊之『HQ 論：人間性の脳科学』海鳴社、2005 年
- 内藤淳『進化倫理学入門「利己的」なのが結局、正しい』光文社、2009 年

本要旨は、『2022 年度 静岡大学人文社会科学部 卒業論文要旨集』第 19 号に掲載されたものを、著者の許可を得て掲載するものである。許可なく転載することを禁止する。